

【日々精進(四十一)】

心にも潤いが生まれる、恵の「梅雨」

近藤真弘

梅雨の季節に入り、はじめとした日が続いています。日本ではこの雨の多く降る時期を「梅雨(つゆ又はばいり)」と言いますが何故この呼び方になったのでしょうか? 調べてみると広辞苑には(梅の

実の熟する時期に当たるからとも、物に黴が生じやすいからともいう)とあります。昔中国ではこの時期を「微雨」と書いて(ばいり)と呼んでいたが言葉が悪いので同じ(ばい)と読む「梅」の字を充てたという話も調べていたら出てきました。

「つゆ」と読むのは湿気で露が滴ることからというような事も語源にあるようです。

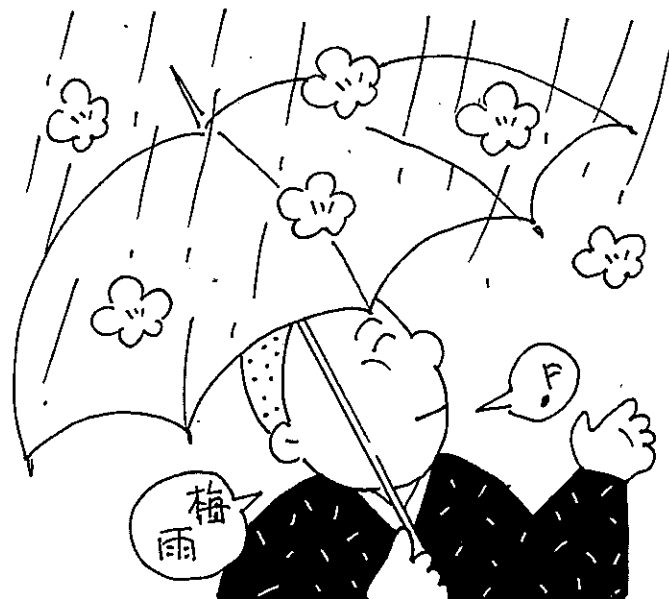
いずれにせよ梅雨はただでさえじめじめした良

い時期ではない印象なので「微雨」から「梅雨」に代わって良かったです。

この「梅」という字は曹洞宗でもよく使われます。道元禪師は正法眼蔵で「梅華の巻」を書かれています。道元禪師もその師である

如常禪師も「梅の花」とても愛していたようです。

雪国の我々は特に感じますが、長い冬が終り春が訪れる情景には梅の花が思い浮かびます。雪深い越前の山中で道元禪師も冬の間、梅の花が咲くの



を待ち遠しく過ごされていたことでしょうか。ただ、

道元禪師、如常禪師は梅に對してただ綺麗な花、情景的に良い、とだけとらえていたのではなくもっと深い仏教的なお考えをお持ちになっていたようです。そういつた事から曹洞宗でお唱えする御詠歌のことを梅花(ばいか)と呼び、その集まりを梅花講と呼びます。梅の花をモチーフにした「ばいかさん・ばいかくん」というマスコットキャラもいます。

なによりも、曹洞宗で師から弟子に法を伝える嗣法(しほう)という大変大切な儀式があります。ここではお釈迦様から代々続く法を自分が師から授けられるのです。そしてその法の流れを



梅の花の散りばめられた紙に一仏ずつ丁寧に書き記していきます。受け継ぎ伝える大切な場面にも梅は記されているのです。

七月に入りまだまだ雨の多い梅雨の時期は続きます。しかしこの長雨のおかげで草木は育み、またその次の季節に、次の代に繋がっていくのです。

まさに自然がいのちを受け継ぎ伝えるためには欠かせないのが梅雨です。必ず過ぎさなければいけない梅雨の時期、嫌な時期だなあと思つて過すのではなく、無くてはならない恵みの時期だなあと思つて過せれば心にも潤いが生まれるのではないのでしょうか。

父と暮らした六年

新田真知子

母が亡くなってからずっと一人暮らしをしていた父と、三十数年振りに長岡で一緒に暮らすことになりました。

仕事もすでに退職して家に居た父は、老人会の会長をさせていた。いろいろ、好きな小鳥を飼ったり、池の鯉の世話、めだかも育てていました。

そんな中で一番興味を持った物がありました。私が帰ってから設置したパソコンでした。操作を覚えると日長インターネットをしていました。聞こえてくるのはユーチューブから流れてくる演歌と軍歌でした。世界が広がったようでした。特に軍歌はお気に入り、家中大きな音が響き渡っていました。

父には思い入れがありました。奈良の天理市で



海軍の訓練をした青春時代があったからです。戦地に行くことはなかったのですが、その時の戦友のことをいつも話し、葉書のやりとり、また、年一回の戦友会にも出席していました。「もう一度、天理に行きたいなあ」と口癖のように言っていました。が、叶えてあげることができませんでした。一緒に暮らして、私が

一番頭を悩ませたのは、食事でした。長く糖尿病を患っていたので、インシュリンを打ち、週三回の透析にも通っていました。制限のある中でメニューを考えるのは大変でした。何しろ、好き嫌いの多い父でしたので、病気のことを考えて作っても口に合わず、口喧嘩の日々でした。「ここまで生きたら、も

う食べたい物を食べる」という父に、私も「もういいか」と心を決め、それからは、好きな物を食べるようになりました。

しかし、長年の病魔はそう甘くありませんでした。敗血症により高熱が出てしまい、左足を膝下から切断しなければならませんでした。命を守るための決断でした。それから、は施設にお世話になり、昨年の十月初め、九十一歳の生涯を閉じました。

今年も、もうすぐ長岡の大花火が開催されます。



生前、花火が近づくこと決まって話していたことがありました。

昭和四十五年、長岡観光協会が市民の心意気と明るく住みやすい躍進する長岡を折り込み、気軽に口ずさめる内容の「音頭」を募集し、沢山の作品の中から歌詞が決定。詩人の深尾須磨子さんが補作し、現在の「長岡大花火音頭」が誕生したそうです。

その時、市役所の経済部、商工観光課に在籍し

ていた父は、この企画を担当し、東京に何度も足を運び、深尾さんと打合せを重ね、北島三郎さんに歌っていただくことになったそうです。この歌の誕生に関わったのは、父の自慢でした。

今年、空から花火を観覧し「ドンドンドン ドンドン おみやしやんがつけた火が走る……」と、口ずさみながら、あの世でもみんなに自慢していることでしょう。

大本山永平寺参拝と能登の旅

関 勝枝



り、東京に住んでいるため、姉と共に現地参加させていただきました。そして、昨年父が亡くなり、一周忌の今年「大本山永平寺参拝と能登の旅」の企画を姉から聞き、今度の旅行で、二本山に参拝出来るとわかり、参加させていただきました。

一日目は安善寺を出発し、実家のある柏崎経由で、新潟・富山・石川・福井の四県を縦断するバス旅行です。

ちょうど一周忌の年に「大本山總持寺二祖峨山禅師六五〇回大遠忌法要と鎌倉・箱根の旅」の企画を知

今回の旅行に参加させていただくのにあたり不思議な「縁」を感じました。4年前に母が亡くなり、

ばを大根おろしのつゆと辛味大根のしぼり汁で、かつお節と刻みネギのみで食べるだけなのですが、全国各地から訪れる程人氣のお蕎麦屋さんで、とても美味しかったです。お腹を満たした後は、目的地大本山永平寺と高野山真言宗別格本山那谷

まず、曹洞宗二大本山の一つ永平寺に向かいました。途中、副住職様のお薦め民家を改装した「けんぞう蕎麦」で昼食を頂きました。手打ちそ



寺の参拝です。那谷寺はお寺というよりは、観光名所かと思うほど巨大な岩と庭園が印象的でした。昨年度は開創一三〇〇年祭

で、本尊の千手観世音菩薩像が公開されたそうので、残念でした。

一日目の泊りは山代温泉「ゆのくに天祥」です。自家源泉天然温泉で三つの大浴場があり、長時間のバス旅行の疲れを癒すには最適でした。

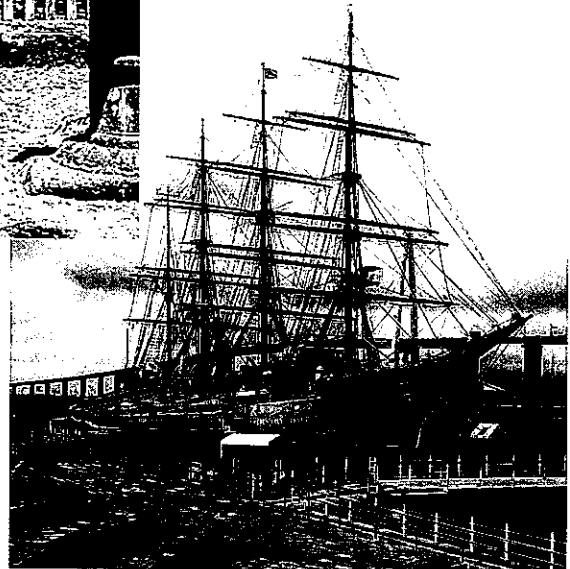
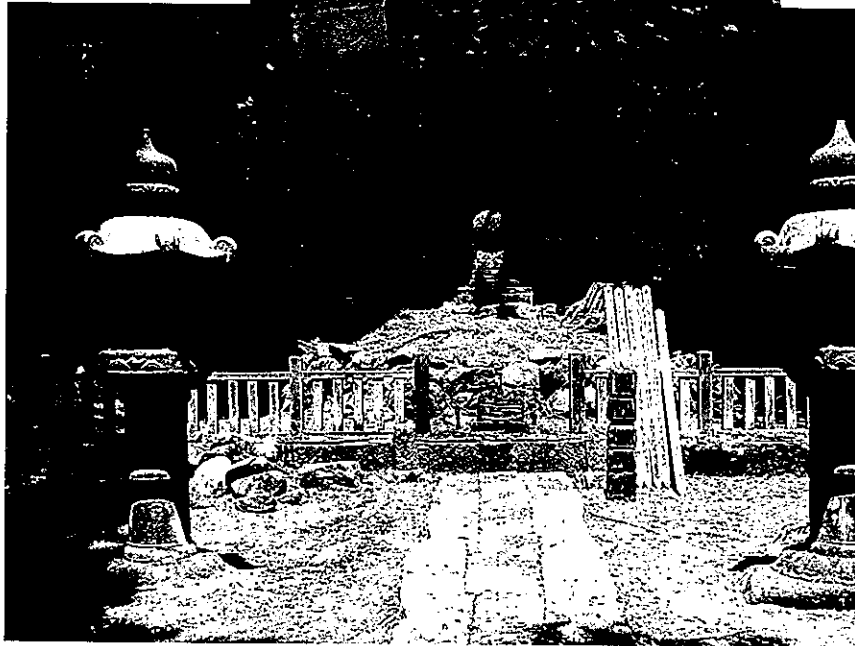
二日目は日本唯一、車で浜辺を走れる千里浜なぎさドライブウェイをバスで走行し、石川県にある洞谷山永光寺に参拝し

ました。永光寺には清らかな水が湧き出ている「白山水」があり、現在も鶴見の本山總持寺に献水されていると聞き、ビックリ

しました。五老峯の左手には、峨山様が永光寺から總持寺までの山道十三里を踏破された山道の入口があり



ました。その後、大本山總持寺祖院を参拝し、NHK朝ドラ「まれ」の舞台になった白山千枚田を、塩かけソフトクリームを舐めつつ観光し、輪島温泉高洲園へ向かいました。大宴会の後に、「御陣乗大鼓」を堪能しました。凄い迫



力でした。

三日目は輪島の朝市を見学し、高岡の瑞龍寺を参拝しました。住職の話のうまさに感動しました。帆船海王丸を観覧した後、帰路につき、無事に三日間のバス旅行が終わりました。

最後まで両親の面倒と供養をしてくれた姉と伴に旅行が出来たことに感謝し、楽しい旅を提供してくださいと皆様にお礼を申し上げます。

合掌

【第26回KAKA笑の会】 精進料理を楽しむ会

加瀬由紀子



今年も、安善寺本堂を会場に「第26回・KAKA笑の会」を、5月11日夕、開催いたしました。
毎回楽しみにおいでくださるお客様も多く、なかでも好評なのが「精進料

理を楽しむ会」です。

本年は、長岡には初めて、とおっしゃる典座の折橋大貴（おりはしだいき）さんをお迎えして、フレンチ精進といった趣向を味わう会となりました。

折橋さんは、1989年

生まれで、大本山総持寺で修行、典座（てんぞ）禅宗の寺院等で、料理を司る要職のひとつとなり、崎村調理師専門学校を卒業。

現在は神奈川県常泉寺副任職と、箱根フレンチレストラン「草庵」シェフを兼務しながら、全国曹洞宗青年会の精進料理講師等、ご多忙な日々を過ごされていますが、安善寺副任職

様の知人ということ、長岡初の「フレンチ精進」をご披露いただく機会に恵まりました。

折橋シェフは、並々ならぬ意気込みで2日前から準備のために来岡。実行委員10名も材料の調達に協力し、いよいよ当日早朝より、シェフの指示に従い、調理に取りかかりました。

刻む、茹でる、皮をむく、すり鉢で擦る、油で揚げる、盛り付ける、お膳を運ぶ等、日頃の主婦業？ の手際良さを発揮、実行委員大活躍で何とか開宴に間に合わせました。



- ① 山芋とアスパラの和風ポタージュ
- ② 山独活、人参、新じゃがのきんぴら
- ③ 手作りガンモ



- ④ 菜の花と根菜のリゾーニ
 - ⑤ 塩漬けトマトのサラダ・ソースピストー
 - ⑥ 新ごぼうの炊込みご飯
 - ⑦ 漬物
 - ⑧ 母のノンアルコールカクテル
 - ⑨ 抹茶のパバロア
- シェフは、周到に人数分のレシピも用意されましたので、その中から数点をご紹介します。
まず①のポタージュで
- の揚出し
- ②の山芋は千葉産の粘度の高い大和芋を使用。炒めた玉葱と、茹でたアスパラを裏ごしし、精進出汁（昆布、干し椎茸等）と薄口醤油、オリーブオイル、塩、胡椒で調味。
- ③のガンモは、木綿豆腐、山芋をつぶし、干し椎茸、人参、大葉、白ごま少々をとともに混ぜ、小さい球形に握って揚げます。かけ汁として精進出汁、大根おろし、なめこ、ミョウガ、薄口醤油、みりん、



砂糖、日本酒で作ります。
④のリゾーニは、長岡では入手できないので、ご持参いただきました。(写真)玉葱、菜の花、人参、筍水煮、ホールコーン缶、精進出汁で調理。



⑤のサラダに添えたドレッシングもシェフが作った箱根からご持参。数種のハーブが醸し出す絶妙な味わいが大好評でした。

⑨の抹茶ババロアは、抹茶、豆乳、植物クリーム、ゼラチン、三温糖を混ぜ合わせ固めて、アクセントに振りかけたきな粉もおしゃれなデザートとなりました。

何ととっても、折橋シェフのレシピを貰っているのが、「精進出汁」です。このコク深い味わいこそは、典座としてのキャリアの為せる技術で、参加の皆様からも「素晴らしいお味を堪能させていただきました」と感想を多数頂戴しました。

副住職 通信

フオートワース 坐禅体験

今年も六月二十二日に長岡市と姉妹都市のアメリカテキサス州フオートワースから交換留学で長岡にやってきた中・高校



生が坐禅体験のため安善寺を訪れました。
通訳を介し熱心に坐禅指導を受けたフオートワースの子供たちは、一五分ほどの坐禅体験の後、客殿で日本茶を飲み、住職の話しを聞いた後、本堂の鐘や太鼓などといった鳴らしものを実際に鳴らし、記念撮影などで約一時間半のお寺体験を楽しみました。

旅立ち

(平成三十年三月、
六月末日まで)

須佐 サト様 三月六日寂
長岡市緑町

苜谷ヨシエ様 三月八日寂
長岡市希望ヶ丘

渡邊 正様 三月十六日寂
神奈川県相模原市

西田 善作様 三月十七日寂
東京都荒川区

河野スミ子様 四月十四日寂
長岡市中島

加藤千恵子様 四月廿一日寂
新潟市中央区

小林タケ子様 四月廿五日寂
長岡市四郎丸

白井 和子様 五月十七日寂
長岡市深沢

品田友太郎様 五月廿九日寂
新潟市中央区

山崎ハツエ様 六月十一日寂
新潟市東区
ご冥福をお祈りします。

ボブの独り言



近所付き合いは大切!

ボブの独り言

いつまでも、寒い日が続き、なかなかストーブを片付けられない日々が続きました。庭の花々はちゃんと季節を知っているのです。お寺の庭でもツバキが多く、「藪の中にこんな珍しいツバキが咲いていたのに、今まで気付かなかった! 見てみて」と、バーバが枝を切ってもつてきて花瓶に入れていました。



今は、どこでも見られる色とりどりの紫陽花。お寺の境内にも、変わった紫陽花が次々と咲いています。最近雨が全く降らないので可愛そうなくらいです。

そんな花を見たいのと、久々にみんなの顔も見たいので、ももの声がしない日に、下におりていきま

した。ちょうど写経会が終わって、皆さんが帰られるところで、「ボブちゃん、久しぶりねー、太ったねー」、私を覚えて下さっていたのです。

年は、泣きながら学校に行っていたのに、町内のお兄ちゃんたちが卒業してしまい、今年からは一年生二人を連れての登校です。何だか頼りなさそうにみえるのですが、私も、ももちゃんにもそ

うですが、真人君はとても優しいんです。学校から帰って来ても、ランドセルを置くか置かないうちに、「真人ー遊ぼうー」って、一年生が玄関の前で待っているのです。

「子供は遊びに来るの知っていないで、親の顔を知らない」と、ばーばが「みんなでお食事会しない?」の一言で、おじいちゃん、おばあちゃん、それに秋から越して来る家族も含めて、大はしゃぎの食事会になりました。

今の世の中、せめてご近所だけは、普通に話せない、子供も守れないですよ。

ニヤーン

編集 雑感

時の流れは早いものです。この季刊誌が発行されてから20年弱の年月が経っております。毎回素晴らしい投稿を戴き感謝申し上げます。編集者も若返りを試みるのです

がなかなか参加者がありません。時代は変わって行くのです、若い方々が継承してくれることを期待しながら編集に従事しております。

時代が変わったと言えば一番大きなことでは来年の安善寺住職が若様に変わる事でしょう。その儀式を行うために総代さんや世話人さん達が準備に入らねばなりません。

費用も掛かる事なので知恵を絞って大事業を行わねばなりません。檀家の方々にご迷惑をお掛けしますが、一生にあるかなにかの晋山式に是非とも参加して欲しいです。

晋山式(しんさんしき)とは、寺院に新たに命を受けた住職(新命)が晋山すること。その式を晋山式という。晋は「進む」こと、山は「寺」のこと。新たな住持人(住持または住職に同じ)として、寺に入山すること。全ての宗派が晋山式を行うとは限らず、宗派によって異なる。曹洞宗は行いません。

来年のことを言うとおめでたいことなのでお知らせしたく早々書いてしまいました。正式には檀家様にご案内が行きますので宜しく願います。何が起きるか判らない昨今です。奇跡を信じ普段の行いを正し日々精進いたしましょう。 小林国一 拝

お便り原稿用紙

皆様の読者・投稿者・通信者、ご一読に誌面を深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

- 原稿の例
- 思い出話 / ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
 - 私に言わせて / 家事や子育てのお話、身近な出来事など。
 - 教えてください / 仏事のしきたりや疑問(編集部や住職が答えします)など。
 - 嬉しい・楽しい / 嬉しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

第八十三号、秋号は平成三十年九月十日(月)発刊予定です